

2009年1月24日・25日 ディレクター2級講習会（滋賀県）

これまで3日間だったオリエンテーリングディレクター講習を、工夫によって週末2日間に。

短期集中講習！

講習は非常にコンパクトなものとなったのはよかったが、初日は9時から22時過ぎまで、2日目も8時すぎから17:15までみっちりのスケジュールで、時間的には非常にタイトな講習会となってしまった。しかしその中身は非常に充実しており、講習終了後は、疲労感もあったが達成感にみちた講習となった。

講習の中身は、何もかもが昔実施されていたレクリエーションチックなものとは大違い。本当の意味で実際にその事例に遭遇したときに役立つもので、期待とおりであった。中でも印象に残った2つの内容について記したいと思う。

危機管理を認識できた

まず1つ目は、OLそのものではないが、野外活動における危機管理である。普段我々は、あまりその危険性を意識しないOLをはじめとするアウトドアスポーツ活動をしているが、昨今のご時勢、指導者や主催者の社会的責任は大きくなる一方である。

実際の事例紹介をもとにおこなわれた講義では、絶対的正解は事柄的に示しにくさがあったものの、想定される事例のロールプレイング的議論の進行により、具体的な内容の理解を深めることができたとともに、その求められる責任の重さ、社会的影響の重大性を改めて意識することができた。

また、愛場講師によるオリエンテーリング競技において実際に発生した怪我およびその対処、そしてその処理方法および問題点、隠れているさらなる危険性を抉り出した講義は、指導員としての責任の重大性の認識を大いに高めてくれるものであった。なお、愛場講師と村越氏との間で以前この誌面でも伝えられたOLにおける危険性とその対応等について、まとめたものが近々作成されるとお聞きしているの、早急なるその完成を待ちたいものである。

技術指導の実習

いまひとつの収穫は、初心者を対象とした技術指導要領作成の実習である。これはこのまえの段階のインストラクターの範疇とも関係してくると思うが、実際に指導すべきことを、2人2組で技術指導のポイントをしゃべり、書き出し、そして現地で確かめる。いろいろ議論し、お互いに気づかなかったことを補えたり、最後にはそれを全員の前で発表しあい、情報の検証、内容の充実化をはかれるといった形式で実施されたものであったが、個人的にはいまままで指導してきたことと重複していたことだったので、より自信をふかめることができた。

とくに初心者に対する地形把握は、公園のオープン（地図では黄色で表される部分）で、尾根、沢、こぶを体験させることは、地形全体が見通せるので非常に有効であるとあらためて認識することができた。

このほか、この誌面でも紹介された「クロスオーバーの楽しみ」の話、中でも長野県でご自身が取り組まれている美谷島さんの信越トレイルの遠大な取り組みの紹介も新鮮だった。

気になる参加者の減少

最後に残念であったことは、参加者が昔に比べ非常に減少している点である。以前は余暇・レクリエーション活動の一環でOLが社会的に学校教育の一環や企業福利、そして行政からの生涯教育のメニューとして広く扱われていたときには教師、役所といったところから多くの参加者が参加されていたが、時代の流れとして、そういうところがOLを扱わなくなっていくと、これらの方面からの参加者＝指導員資格取得者が減少していったことは残念なことであると思った。そのかわり、仕事の一環として、上司の命令により参加させられてきた非能動的資格取得受講者が減少したために、冒頭にのべたように、競技OLに専門化した内容で実施できるようになったとも言えるのではないだろうか。

話はすこしそれるが、今は更新していなくても、以前そういう形で資格を取得された人数は結構あるのだから、いまままた、そういった人々が何らかの形でOLに接触し、OLに親しめ

るような仕掛けづくり、およびそれをうまく活用したOL普及活動もなにか工夫できないかとの考えも頭をよぎっている。

また、村越講師自身が提唱されていたが、こういった指導員講習会内容を学生の指導的立場にいる人が、資格の取得の有無は少し横に置いておいて、純然たる後輩指導に生かせるチャンスが設定できないものかということであり、これは非常に心残りになった部分であった。

実際、この講習を受講し、減少し続けている関西の学生オリエンティアへの指導に早速役立てようとしている講習会参加者もでてきたが、肝心の学生、特にその学生に指導していくべき高学年層のオリエンティアとの第1次的要求と一致せず、難儀をしているようであるのは、残念な現実である。

すなわち今彼らの直面している課題は、指導する対象者を確保できない＝新入生がOLクラブに入らない。いれる工夫が実らないという、指導で定着させる以前の問題が大きく、入部あるは体験までもってくることまでが、根本問題になっているようである。講習会で学習した小学校でのスクールOL（これも講習会メニューで実際に体験してみて、思っていたよりはるかに面白かった）の大学生版を開発するなど、工夫点はいろいろあると思うが、考えと実践との狭間でいまひとつ何かの要素が必要であるように感じられる。そういったことに気づけただけでも、この講習会に参加した価値は非常に大きかった。

そしてなによりも同じ問題意識をもった講習会参加者がワイワイ・ガヤガヤいろいろな考えをのべるといったコミュニケーションがはれたことがもっとも大きな収穫といえる。（野澤建央）



▲演習形式が多いのも、ディレクター講習会の特徴。具体的な課題を通して、それまでの実践の振り返りや気づくも得られた。